

# 知恵の樹

No. 119 2007. 4. 26

町田の図書館活動を  
すすめる会

事務局:町田市森野 3-1-12 増山方  
〒194-0022 FAX042-722-1244

4月7日の町田市民病院患者図書館 学習会 **報告**

## 市民の求める情報とは ～横浜中央図書館の医療情報サービスから～

去る4月7日(土)13:30～16:30、町田中央図書館ホールにおいて表記の学習会を開催した。講師は、横浜中央図書館司書吉田倫子さん。元町田の図書館活動をすすめる会のメンバーである。横浜市は“市民医療を考える横浜懇談会”の提言を受けて、昨年12月、横浜中央図書館に医療情報コーナーを開設した。準備過程から関わってこられた吉田さんに、市民が求める公共図書館の医療情報サービス、またその現状等についてお話いただき、その後町田市民病院内における望ましい患者図書館について話し合った。川野さんに報告を寄せてもらうと共に、参加者・塚田さんからのレポートを紹介する。

### 市民の求める医療情報の 提供ノウハウ教えます

参加者は、わざわざ静岡からこの話を聞きに来られた医療図書館現職のスペシャリストの方々や、町田の図書館および市民病院職員、会員、町田市や他市の市民など、計20名。皆さん熱心に、社会ニーズに応える図書館のあり方、最前線の実践例とノウハウなどの聞き学問をし、さらに懸案の町田市民病院における病院内・患者図書館のこれからについて額を合わせた。

的確なことば、的確な表現で早口で語られる吉田さんのお話の内容の照準は、最小の投資で最大の効果をあげるための病院図書館のソフト設計にぴちりとあわせてある。

この講演のために吉田さんは、町田中央図書館蔵書の基本医療図書のそらい具合を調べられ、その上で、何を伝えるべきか、話の筋道を構成・



写真提供:タウンニュース社の淀縄薫さん

用意されてきた入念さである。「病院図書館司書はリサーチ能力と専門知識の学習能力が必要」とのことばに、なるほど、それは徹底的なリサーチ能力のことであり、どんどん勉強していく先取的学習能力のことであり、人のニーズを見抜く洞察力の三つ巴のことですね、と吉田さんが熱くかたる冷静な横顔をまじかに拝見しつつ私はうなづいた。いやはや、専門家というものはいらいものだ、とアマチュア専門の私がばか口をあけておおいに感心していると、そんな暇ありませんよ、と矢次早に専門必須事項を教えてくださいるので

大慌てでノートをとった。

## 医療情報コーナーの3本柱

**1.** 病気や医療について調べる時、最初にアクセスする参考資料コーナーである。それには、3段階のレベル(医師向け、看護師等向け、一般向け)がある。常識とは異なり、患者さんのニーズは、実は、一般向けのみならず、その全ての情報に対してある。

インフォームド・コンセント、セコンド・オピニオンが医療の中に当然のこととして組み込まれてきた現在、患者・市民が専門的医療内容にアクセスできる体制を整備する必要がある厚生省からも求められている。例えば、「診療ガイドは最新版を用意」などはイロハのイであり、有料医療情報サイトで原著論文にアクセスという超！専門情報(アクセス先も教わりました！)も、患者さんのニーズ内だそう。

— 難病で苦しむ方々も多くおられるが、医療も日進月歩している。医療従事者とともに患者自らが、医療情報を知った上で医療方法に同意するという形で、医療の大切なステップを3者(医師・看護師・患者)で担う時代が到来してきている。そのための患者の情報の仕入れ処として存在する病院内患者図書館は、時代をさきがけて進む船のようだ。これは、患者・家族のためのみならず、患者さんから同意を取るための説明に要する医師の手間を減じ、さらに、患者さんご自身が納得して選ばれた医療は効果が高いということで、積極的にがんの患者さんに選択を任せる病院もある。

**2.** 市民が自力で医療情報探索をするための基地である。闘病記が治療にプラスになる効果は認められているが、きちんとした医療的水準をみたしたものでどうか判断する選本技術が必要。さらに、利用しやすいように、病気ごとなどの分類・配架が必須である。

**3.** 患者会資料・診療ガイドライン・医療講座のチラシなどさまざまな視点で資料を収集し、多角的な情報提供をする。

その地域で活動している患者会のような団体の情報も、重要な資料であり提供したい。

一般の医療情報の配備で十分と思われるが、実は病院における図書資料の需要は多岐にわたる。QOL(クオリティ・ライフ=精神的豊かさをどう過ごし

たいか)が病院で求められるようになるに従い、代替医療、患者学、人生論など各分野図書、音楽CD、旅行ガイド、グルメガイド(治ったら！という元気の基)、さらに長期患者さんには、病床での衣料、お化粧品などの資料も需要が高いようだ。

— 病とともに生きる人生もある。そうなのだ。この点で、患者さん・介護のご家族の要望図書を市立図書館から連携して取り寄せられるタイプの患者図書館は理想的であるとか。10年前に立案された町田市民病院内・患者図書館計画は先見の明がある、と最先端に行くプロからの賛辞を得た(うおっほん！)。設置された暁には町田市の評判は上がるでしょうねー病気でも人生を豊かにすごせる病院です！QOLは病院のアメニティ(居心地のよさ)のはるか上位の価値である。QOLは、特に終末期医療ターミナル・ケアにおいて、重視されるファクターでもあるのだ。

さて、最小の投資で最大の効果を上げるために明かされた秘策というのは、医療専門司書のプロの目による厳選基本図書のミニマムひと揃えプラスその最大活用である、という。司書の専門的配慮による、情報のレベルを考慮に入れた配架など、自分で調べられるナビゲーション・システム編成によって、初期投資効果が何倍・何十倍にもはね上がる。

また、インターネットでの資料検索の需要も高いようだ。重大かつ深刻な状況にある進行性の病気を抱えた患者さんやご家族にとって、ニーズにぴったり合った情報検索は、一般の検索とは質が異なる。患者さんの現状を察知し、患者さんの求めに沿った、より質の高い情報を、的確にリサーチしていく作業は精神的意味合いをも含めて相当専門性を必要とされる。

また、病院図書館スタッフには患者さんのプライバシー守秘義務が徹底して求められる。この点からも高い意識を持つ専門的訓練を経た司書が望ましい。そして提供する情報が、どの程度の信頼性をもっている情報なのか問われる。微妙な線引きをきちんと見分けて伝える、これこそ医療司書としての専門トレーニングを必要とする仕事分野なのである。

### <交流会から>

「目の前の患者さんは某病気のどこの段階の症状を呈しているかを的確に判断し『それなら参考資料はこれですよ』と出す能力が司書に求められるのですよ」というTさんからの専門的経験談などが明かされ、一

同圧倒された。

町田市市民病院は、新年度を迎えて電子カルテ導入、新病棟開設、ターミナル・ケア科新設などの新事業が目白押しで、その準備でただでさえ忙しいところに、患者図書館の運営が市側から降って湧いたように病院側に委ねられ、何も考えられない状態にあるらしい。

新病棟の中に患者図書館が設置され、図書館として機能するならば、地方公共団体が持つ病院としては最新の医療の流れに乗った先駆的業績となるであろう。そして、医師・看護師・市民の3者共同の医療の実現に益するであろう。

非採算部門とみなされている患者図書館が、病院の本質的部分である医療の質、QOL、労働の質(Quality of medicine, life, and labor)を高めるのに大きく貢献する力は計り知れない。誰も生老病死時に出会う困難から逃れられる人はいない。しかも年々高齢化人口が増加する今日の日本社会において、老・病・死の苦境のわびしさをおぎない、力づけ、更に病院経営を円滑にする、ひとつの優れた社会政策が町田市市民病院の患者図書館計画なのだ、ということを理解した。

(報告:川野 恵)

---

## 「横浜&町田」

### —塚田薫代さんのレポートから—

塚田さん(静岡県立子ども病院患者図書室司書)は、当日朝早くに静岡を発ち、吉田さんが勤務している横浜市中央図書館を見学されてから、町田の集会に参加して下さいました。そしてすぐ、バイタリティ溢れるレポートが、メールに配信されました。塚田さんの了承を得て、掲載します。

### 横浜市立中央図書館 医学情報コーナー

かなり専門的な医学書(コメディカルの閲覧に耐えうるレベル)／出版年があたらしい／選書が的確／診療ガイドライン・患者会情報を収集／医学雑誌・学会誌を購入している。

公共図書館の49部門として、すばらしい内容と思います。

医学生や看護師のテキストレベルのものが、バランス良く選書されているという印象を受けました。

かといって、専門書に偏ることなく、一般向けも網羅し、尚且つ他のジャンルにも容易にリンクできるところが、公共図書館の強みだと改めて感じました。

例えば、小児科分野でいえば、『ネルソン小児科学』『ハリソン内科学』『医学書院標準シリーズ』あたりの超スタンダード(医学図書室において)、『小児血液がんの標準的化学療法』『WHO母乳育児支援ガイド』あたりの臨床現場での実践的医学書、『日本小児科学会雑誌』『看護技術』『臨床看護』といった学会誌、医学雑誌までであるのには、大変驚きました。

### 「町田の図書館活動をすすめる会」学習会

横浜市立中央図書館の吉田倫子氏が、医学情報とはどういうものであるか、公共図書館の側からお話され(これは大変説得力がありました)、図書館と病院が協働して患者図書室をつくりあげるのが良いのではないかと提言されていました。

私は、経緯も知らないまったくの部外者ですので、病院における患者図書サービスについて、病院の立場にたって少しお話をさせていただきました。

- ・インフォームドコンセントに役立つ
- ・患者と医療者のコミュニケーション促進に役立つ
- ・病院機能評価でポイントが高い。

医療機関は、どこも大変な状況を抱えています。**【安全管理、電子カルテ、DPC(包括払い方式)、医師・看護師不足・・・】** 保険診療点数の付かない非採算部門である図書、とりわけ患者図書サービスは、優先順位の低い事業であるのです。病院サイドの事情を考慮した上での提言が必要かと思われました。いずれにしても、これに関心を持っていただけるのは、現場の人間としては素直に嬉しいことです。

町田市市民病院にも小児科があります。より良い患者図書室が設置されるようお祈り致します。

007.4.7 塚田



# 『巣箱 森のいのちを育てる』

巣箱の本をくもん出版から出しました

児童文学作家 国松俊英

数年前のことです。古い自然雑誌「アニマ」を読み返していたら、“巣箱”の特集をやっている号を見つけました。1989年11月号です。その号を読むと、巣箱が森の生きものの新しいすまいとして見直されている、と書いてありました。そして、森の生きものたちに巣箱をかけている人たちの仕事ぶり、奮闘ぶりが紹介されていました。

おもしろいと思いました。それまでの私は、巣箱というのが大きな働きをするものとは思っていませんでした。巣箱は、子どもたちが学校の工作の時間に作り、学校や公園の林にかけて巣を作った小鳥を観察するもの、そんなイメージを強く持っていました。それで「アニマ」の記事を読んで驚いたのです。

巣箱はこんないろんな生きもののために働いているのか、森の再生に大きな役目をはたしているのだなど、気づかされたのです。新鮮なものを感じました。「アニマ」は古い号ですし、記事もずっと前に書かれたものです。記事が書かれ十数年たっているのだから、日本の巣箱はもっと進化しているはずです。巣箱について調べてみようと思いました。

おなじ頃、「樹洞」が減って生きものが困っている論文や新聞記事を読みました。樹洞とは、古い木、大木の幹にできた穴のことです。“うろ”とか“ほら”ともいいます。大木がつつぎつつぎになくなり、古い大木に残った樹洞も木を長生きさせるためとして、穴をウレタン樹脂などで埋められているのです。それで森の樹洞をすみかにしている多くの生きものたちは困りました。それらを助けてくれるのが巣箱でした。

巣箱の取材で最初に訪ねたのは、北海道・根室の森です。シマフクロウの保護に打ち込んできた山本純郎さんに、

森を案内して頂きシマフクロウの巣箱を最初にかけた頃の話をお聞かせしてもらいました。山本さんはシマフクロウにあこがれ、大阪から北海道に移り住んだ人です。シマフクロウの調査をつづけていて、巣箱かけを思いつきました。そして巨大な巣箱を作り木にかけたのです。シマフクロウはすぐに利用し、巣箱かけは成功しました。やがて協力してくれる人がふえ、シマフクロウの巣箱かけは、いまでは環境庁の事業となって続けられています。山本さんの話は、聞いていてこちらも熱くなってくるものでした。

つぎには、長野県の南の天龍村へ行って、小学校を訪ねました。ここでは数少なくなったブッポウソウの巣箱かけを、小学校の子どもたちがやっていました。足利市の古い寺、長林寺にも行きました。森にすむコウモリのための巣箱について聞くため、「コウモリの会」にもでかけました。3年がかりの取材でやっと本ができました。

(本会会員 小山田桜台在住)



『巣箱 森のいのちを育てる』 くもん出版

小学校中学年以上 本体 1300円

## どの本読もうかな ～2006年子どもの本を振り返って～

広瀬 恒子氏 講演会

2007年3月27日(火) 10時半～12時半 中央図書館6階ホールにて

町田の図書館活動をすすめる会主催によるこの講演会は年中行事として定着し、主催者ももう何回を数えるのかわからないほど回を重ねてきた。その年の児童書・YA図書のおすすめを紹介されるに留まらず、社会の動きや子どもたちをめぐる課題などを鋭く指摘される広瀬氏のお話が楽しみで足を運ぶ常連も多いようだ(私もその一人)。春休みということもあり町田だけでなく横浜や多摩地域からの参加者もちらほら交えた50人が、お話に熱心に聴き入った。

### はじめに

近年目にする「〇〇力」(「親力」「人間力」「鈍感力」etc)の多さに、コミュニケーション能力への関心・期待の強さはわかるが、「力」を促成栽培で得ようとする怖さを感じる。これらの力とは長い営みの中で培われていくものではないのか。読書に関しても「本を読ませ大賞」、「読み聞かせコンクール」などがあり、ランク付けに疑問を感じる。また「ボランティアリーダー」講座なるものもあり、ボランティアの中にそのリーダーを養成するというおかしなことが始まっている。さらにA区教育委員会の「読み聞かせ」を「読み語り」と統一するなど、本来読む人が主体的に決めるべきことに行政が関わることでねじれが生まれつつある、子どもにとっての読書とは何なのか、もう一度原点に帰っての問い直しが必要なのではないだろうか。

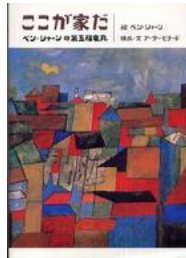
### 子どもの本の出版動向から

2006年の児童書新刊総点数は4,380点で1975年からの「子どもと読書」(親地連)調査では最多点数。ただ多いということは必ずしもよいこととは言えず、安易な子どもの本作りも目立った。どういふ本を子どもに手渡していくのか、目利き、選書眼の必要性を感じる。また児童文学の映画・アニメ・TVなどメディアミックス化が進み、『ゲド戦記』などがアニメ化により売れ行き急上昇という現象も。あさのあつこに見られる、ブームになることのすごさをまざまざと感じるとともに、

その試練を作家が如何に乗り越えていくかの難しさも感じた。

### 絵本では

児童書全体の42%を占め、依然絵本の多さが続いている。内容的にはYA向きなどが増え、反面幼年童話の地盤沈下に拍車がかかっている。また名作幼年童話(あまんきみこ、後藤竜二など)が絵本・絵童話の形で多く出版され、文学の形でなくヴィジュアル形式の出版の動きが目立つ。サブダのしかけ絵本など、ポップアップ絵本も活発。すてきな赤ちゃん絵本には『なーらんだ』『くつついた』(三浦太郎/こぐま社)『どーこだどこだ』(カズコ G. ストーン/童心社)など。絵と文がマッチした絵本に『はたけうた』(田島征三/福音館書店)や『やきいもの日』(村上康成/徳間書店)、『ここが家だーベン・シャーンの第五福竜丸』(アーサー・ビナード構成/ベン・シャーン絵/集英社)では第五福竜丸の悲劇を力強く描いたベン・シャーンの絵が見るものを圧倒する。忘れてはいけない、覚えていること、というメッセージを大切にしたい。『ぜつぼうの濁点』(原田宗典/教育画劇)は濁点をシンボリックに扱った矢やYA向きの絵本。フランスのルリユールの元での取材が美しい絵本に結実した『ルリユールおじさん』(いせひでこ/理論社)では本作りの職人魂が、



実在の司書をモデルに作られた『おんちゃんはお車イス司書』(河原正実・原案/梅田俊作・作絵/岩崎書店)では司書の仕事のありようも覗える。

### 読み物では

低・中学年では『ハキちゃんのはっぴょうします』(薫くみこ/佼成出版社)、『ねこのなまえ』(いとうひろし/徳間書店)、『のんきなりゅう』(ケネス・グレーム/徳間書店)などが楽しい。素材の奇抜さを無理に追い求めるような作品もあり、もっと素直に書いてもいいのではないかと疑問に感じた。高学年・YAではソ

フトカバー・新書版のエンターテインメント作品が増えている一方、『ハリー・ポッター』以降のファンタジーブームも続いている。

このところ日本での新人作家の活躍が嬉しい。『かいたれ』『たそかれ』の朽木祥、『冬の竜』の藤江じゅんはローカルな舞台設定がユニーク、『天山の巫女ソニン』の菅野雪虫も楽しみ。もちろんベテラン作家も健闘しており、斎藤洋『白狐魔記』の新刊、佐藤さとる『天狗童子本朝奇談』、富安陽子『オバケだってカゼをひく』などがあるが、特に上橋菜穂子の作品が注目される。『天と地の守り人』は1996年の刊行から10年がかりでようやく完結を迎え、「長い旅路がようやく終わった。書き始めた当初はこんなに長い物語になるとは考えてもいなかったが、巻を重ねるごとに異なる風景が見えてきて、当初の予定よりはるかに大きな物語になっていった。この10年長い旅にお付き合いいただきありがとうございます」との上橋氏の言葉を披露。子どもだったチャグムがすっかり成人し、読み手の我々にも感慨ひとしお。ほぼ同時に出された『獣の奏者』(講談社)もエンターテインメントとして秀逸で、善と悪との二元的な捉え方でない、上橋氏独特の多角的視点を感じる。『風神秘抄』の荻原規子氏とともに、今もっとも脂がのっている作家といえる。

現実を生きる子どもを描いた作品では『トモ、ぼくは元気です』(香坂直/講談社)が、障害を持った兄に関しての弟の心の葛藤を描く。本音で喋れない、場の空気を読めないと萎縮してしまう今の子どもに共通の心理を捉えた『ツーステップス!』(梨屋アリエ/岩崎書店)やサンケイ出版文化賞を受賞した八東澄子の『わたしの好きな人』(講談社)がよかった。ノンフィクションでは町田在住の作家 国松氏の『巣箱森のいのちを育てる』(本号p4参照)や『アフガニスタン 山の学校の子どもたち』(長倉洋海/偕成社)が力作。『グローバル化とわたしたち — 国境を越えるモノ・カネ・ヒト』(村井吉敬/岩崎書店)や『実物大恐竜図鑑』(デヴィッド・ベルゲン/小峰書店)などの作品も注目。

## 海外作品では

「戦争や暴力」で片付けさせない筆力にその底力を感じた。戦争を描くと、とすれば「あーまた」と思われがちになってしまう日本の作品と違って、人間の描き方がリアルで、その息遣いまでもが伝わ

ってくるようだ。第一次世界大戦中の兵士

達が決定的に始めたというクリスマス休戦を描いた『銃声のやんだ朝に』(ジェームズ・リオードン/徳間書店)、第二次世界大戦中のロシア人捕虜の少年を助けて逃亡する少女の物語『ふたりきりの戦争』(ヘルマン・シュルツ/徳間書店)、ワルシャワでユダヤ人の子どもたちが発行し続けた新聞が大人達も勇気づけた実話に基づく『ちいさな命がくれた勇気 — ナチスと戦った子どもたち』(キャシー・ケイサー/主婦の友社)、日本占領時代の韓国を描く『木槿の咲く庭』(リンダ・スー・パーク/新潮社)などが注目される。また歴史的な題材を扱った『私が売られた日』(ジュリアス・レスター/あすなろ書房)は戯曲の形でアメリカ南部の奴隷市を、『ベラスケスの十字の謎』(エリアセル・カンシー/徳間書店)は実在の名画をめぐる謎を描く。『愛をみつけたうさぎ』(ケイト・ディカミロ/ポプラ社)は、陶器のうさぎが旅を続ける中でさまざまな出会いを描くファンタジー。



## 子どもの読書にかかわる動きは

活字離れと言われながらも図書館が健闘しているようで、児童一人当たりの貸出冊数は過去最高を記録。小学生が借りたのは約1億3500冊(1人当たり18.7冊)で、児童数が減少しているなかでは特筆できる。ますます活発になってきている読書ボランティアだが、一人ひとりの自覚が問われている。

## 終わりに

『母からの伝言 — 刺しゅう画に込めた思い』(エスター・ニエンタール・クリニッツ/バニース・スタインハート作/光村教育図書)はホロコーストを生き抜いた女性が、50歳になってから、自分の体験を埋もれさせてはいけない、刺繍で残していこうと思いたち一針一針丹念に刺した刺繍画を絵本にまとめたもの。

『いわたくんちのおばあちゃん』(天野夏美・作/はまのゆか・絵/主婦の友社)では写真を撮ることが悲劇の思い出となってしまったおばあちゃんのお話が描かれる。

今私たちは何を伝えたいのか、人間の価値として伝えたいものを真摯に考えていきたい。



2時間あまりに及ぶお話で紹介された本は 70 数冊。とても全部をご報告できないのが申し訳ないです。これだけの内容豊かな講演会なのに(町田以外からいらしている人もたくさんいるのに)、春休みということが災いしたのか、肝心の町田の子どもの本に関わる人の参加が思ったより少なめで残念でした。児童書の出版点数が増えているからこそ、子どもと本の橋渡しがいよいよ重要になってきている状況の中で、何を選ぶか(何を選ばないか)、何を手渡すか、もう一度それぞれが真剣に考えたいとも感じました。

(水越規容子)

## 町田の学校図書館を考える会

### ★学校図書館のこれから 語り合ってみませんか

3月24日(土) 午後1時半より4時半まで  
中央図書館6階ホールにて

町田の学校図書館を考える会&図書指導員有志による呼びかけで上記の会が開かれ、図書指導員や読書ボランティア、市民、市議会議員など 24 名が参加、学校図書館の現状や悩みについて忌憚のない意見を交わすことができた。皆がみな同様の悩みを抱えており、特に問題とされたのは 1) どこまで

踏み込んでしてよいのかの判断がつかないこと(カウンセラー的対応が必要な場面:いじめの避難所、エスケープの場、恋愛相談、教職員の相談なども)、2) 生徒指導が必要とされる場面(図書委員、清掃、教員がついてこない場合?)などの訴えだった。図書指導員はあくまで補助であり“指導の必要はない”とは表向き、現実には児童・生徒を前にしては通用しない。特に事故などが起きた時の責任は? 健康診断も(正式には)受けていないのに、長時間子どもたちに関わってよいのかという疑問も出された。また図書館運営に関しても、必ずしも専門知識がないのに(そのための研修もない)、選書や廃棄をせざるを得ない現実にも疑問が出された。さらに個人情報保護がやかましく取り沙汰されている中、いくら信頼の下に指導員が配置されている? とはいえ、守秘義務についての正式な話などもまったくなされない現状に危惧を抱かざるをえない。

話はとめどなく続き、ある人が訴えるとすぐさま他の人も「そうそう、うちも」と重ねて話が進む。なかなか結論には至らなかったが、とりあえず全員一致で、①各校の現状を正確に把握できるようなアンケート調査の実施、②今年出されたマニュアルについての意見の募集、③市教委主催研修についても具体的内容についての要望を提出、などがまとめ、アンケート結果を集約して要望書として提出することを確認した。当然指導員の公募、待遇の改善、研修のあり方などについても盛り込むことに。忙しい中たくさんの方々が参加され、本音で語り合う会が持てたことはとても有意義に思う。ぜひこの熱意をこれからの活動に反映させていきたい。(市川)

### 町田市立図書館協議会より 町田市中期経営計画(第1次素案)

町田市ウェブサイトで公開(PDF)、同時にパブリックコメントを募集中です(5月18日まで)。これは「市民すべてが希望の持てるまち」を基本理念に、「市民協働の町」「環境先進都市」「子育て・保健福祉の町」「商業・文化芸術都市」の実現および、「徹底した情報の公開と提供」「効率的で効果的な行政運営」「持続可能な財政の確立」の行政経営改革を着実に具体化していくための5か年の戦略計画です。市立図書館協議会にて資料として配られ、不覚にも初めて目にしました。サイト上には確かにありますが、丁寧に見ないと気付かないかもしれません。ぜひ周囲の方々にも知らせ、多くの市民の意見が反映されることを願います。

図書館や市民センターで閲覧できます。ダウンロードはこちら

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/torikumi/tyukikeieikeikaku/chuukeichiji/index.html>

市立図書館協議会では、上記及び東京都教育長会によるアンケート調査結果(公立図書館と学校図書館の連携について)を協議・検討、またヤングアダルトコーナーについても引き続き検討中。次回はコーナー設立に関わった図書館職員、現在の担当職員からも話をお聞きし、YAコーナーのあり方について考えていく予定です。(水越)



<定例会報告> 3月23日(金)13:00~16:30  
於・中央図書館中集会室

出席／伊藤、片岡 久保、島尻、武井、中山  
前島、増山、水越、桃澤、山口

13:00 から会報折こみ作業 例会

●3/27(火)の広瀬さん講演会「どの本ようかな」  
について…9:30 集合

役割分担／資料作成:水越・増山, 進行:増山  
受付:伊藤・久保, 報告:水越、花:島尻

●4/7(土)「市民が求める医療情報—病院患者  
図書館学習会」…13:00 集合(⇒当日資料印刷そ  
の他のため 10:30 集合となる)。

役割分担／広報担当(市議・新聞関係に):桃澤、  
前島・伊藤、進行:増山、受付:伊藤

●5/19(土) 前川恒夫氏講演…当日は 15:00~  
16:30 の講演のみで、質疑応答もなし。

組合との共催とし、講師謝礼を分担してもらう。講  
演会終了後、当会の今後のあり方、次年度につい  
ての話し合いをすることに(⇒前川さんは、体調を  
崩されたとのことで、残念ながら講演会は中止とな  
る。会の今後についての話し合いをこの日にする  
かどうか、4月定例会で決める。話し合いは、多く  
の会員に出席してもらいたい)。

### ●会報について

118号の多摩文庫連の文庫展について…多摩市  
の中学校区の図書館を調べた生徒がいて、その  
地図が展示されていた。とても興味深かった。

### 119号の記事について

・学習会の報告 ・広瀬さんの報告 ・  
・図書館子ども読書推進 5ヵ年計画の今までとこ  
れからの取り組みについて一原稿依頼は水越  
図書館協議会、学校図書館の動きを毎号ニュース  
として載せる

### ●その他

・図書館友の会全国連絡会報告…中山さん  
・韓国では大統領命令で図書館を1,000作るとか  
・フィンランドも図書館は元気。日本は?  
・武井さん…病院図書館の実情を報告、厳しい  
・桃澤さん…玉川学園「九条を守ろうの会」紹介  
・かえで文庫…新年始めにかかるた会とお茶会を開

## 町田市民文学館

### 文学サロンで楽しむ おはなし会

5月より、毎月第3木曜日 10:30~11:30、まちだ  
語り手の会の協力で、大人を対象としたおはなし  
会を入口サロンで開催します。

耳からの文学をどうぞお楽しみに!

### 第1回 5月17日【プログラム】

- ・八木重吉の詩
- ・スクナビコナの神(古事記から)
- ・つつじの娘(日本の昔話)
- ・やまなし(宮沢賢治作)

無料

申し込み不要(問:文学館 042-739-3420)

く。子どもたちにも好評でその後お茶会をまた希望  
される。文庫ではあるが本を借りる子は少ない。本  
への誘いに思考錯誤している。

・学校図書館…学校図書館についての講演で講  
師をどなたにするか思案中、他。

●次回以降の定例会は、5/25、6/29、7/27、9/28  
**お知らせ**

★まちだ語り手の会では、お話や読み聞かせをして  
いる人、またこれからやってみたいと思っている人を  
対象に、6月9日~7月28日(各土曜日午前)、「学  
校おはなしボランティア 7回講座」を町田市民フォー  
ムで開催します。

詳細は事務局(☎&FAX 042-795-3022)へ。

HP <http://www.makatarisakura.ne.jp>

★東大和市…去る3月26日の市議会予算特別委員  
会における委託問題に関する議員の質問にたいし、  
市長より「図書館の窓口業務しない」と明確に答弁が  
なされた。これにより、図書館の業務委託問題は正式  
に撤回されることとなった。(3/28)

★「フィンランドの教育」講師:廣瀬由美子さん(公立  
小学校教諭)/5月25日(金)18:30~/小金井市公民  
館本館学習室A+B/参加費 500円/主催:北欧楽会  
03-5382-5315 小林

**あとがき** 3月初めに出した病院患者図書館に関  
する要望書の返事が市長名で送られてきた。驚い  
たことに文面は、一個人が病院図書館について「市  
長への手紙」として出したものに対する返事と一  
字一句判で押したように違わないもので、「…清  
潔さ、明るさ、…の癒しの空間として感じていた  
だけのよう工夫をしております」とある。

病院事務方が返事を出し、市長が決済を下した  
とのことだが、何の誠意も感じられず、民主主義  
を装い内実適当に市民をあしらっている市政がひ  
しひしと感じられる。「市民の皆さん、どうぞ市政  
にご意見を！」がポーズだけに終わっている町田  
市政を感じているのは私だけだろうか? (M<sup>4</sup>)